

# いけばなの はじまり

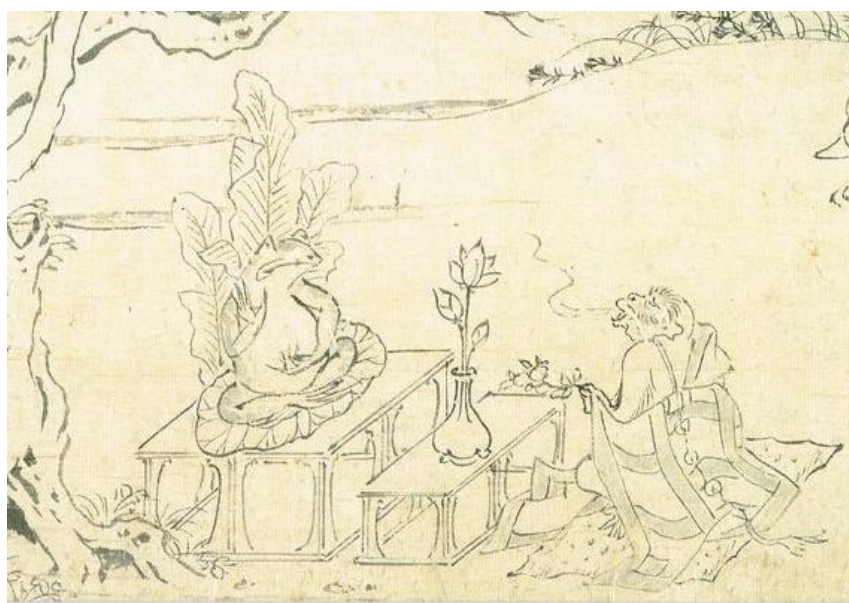
花を器うつわに生けるという行為は、古くは仏そなに花を供える「供花くげ」に源流げんりゅうをみることができます。

平安時代には、『枕草子まくらのそうし』の中に、桜の枝を瓶へいにさして鑑賞していたことが書かれています。

室町時代には、京の有力公家邸くげにおいて「花御会はなぎよかい」と呼ばれる、持ち寄った花の優劣ゆうれつを競う遊びが開かれていました。

次第に寺院そうりよの僧侶の中から花を専門に扱う人が現れ、その技術ひでんじよを秘伝書として著あらわしたことにより、いけばなは、座敷に飾る独立した作品として成立していきます。

このように、いけばなは仏前くげの供花から発展し、和歌や連歌れんがの席の座敷飾りとして、鑑賞の対象となる作品に整えられていきました。



仏前供花のようす  
〔鳥獣戯画絵巻〕〔平安時代後期～鎌倉時代初期〕より